

# 山本泰順『洛陽名所集』にみる嵯峨野をめぐるまなざし

長谷川 奨悟

## I. はじめに

佛教大学宗教文化ミュージアム（以下、当館）では、令和1（2019）年度より平常展示「祈りと祀り、そして暮らしー宗教文化研究への誘いー」において、地域展示「嵯峨野学事始め」を度々おこなってきた。この展示は、嵯峨大念佛狂言や嵯峨野六斎など地域に伝承されている民俗芸能資料に加え、近世・近代の名所地誌本や鳥瞰図、絵葉書など地理的メディアによって構成される場合が多い（図1）。



図1 嵯峨野学事始め展示風景（2019年7月撮影）

「嵯峨」という名称は、『類聚国史』延暦21（802）年8月27日条の「嵯峨荘」が歴史資料における初見とされ、平安期降、この地が天皇や貴族たちの山荘として栄えた要因には都の郊外にあって恵まれた《自然》の美しさにあったとされている。「嵯峨」・「嵯峨野」とされる空間は、近代初頭の嵯峨野村・下嵯峨村・天龍寺村・上嵯峨村の旧4か村を含む地域（図2）を、「嵯峨」という概念で捉えられてきたという（京都市1994）。

ここでみられる四季折々に変化する自然景観や里山での《遊び》を目的に多くの人々が訪れる行楽地としての場所性、大小様々な寺社の存在や信仰の場といった宗教性、地域に根付き伝承されてきた民俗芸能や祭礼行事。名産品の生産の場といった、京都西郊としての「嵯峨野」における地域の性質を表す地域構成要素の多くは、京都中心部との深い関係性の中で構築（再構築）されてきたものであり、そこで形成された歴史性や民俗誌の諸要素は、常に京都内外の人々にとって多面的な《消費》の対象としてまなざされてきた。これらに価値を見出し、多種多様なマスメディア、SNSを通じて不特定多数に向けた地域イメージの生産（再生産）や諸情報発信の営みは、現在に始まったものではない。歴史的にみれば、使用されるメディアの性質や共有される規模などに大きな差はあれど、歌や文芸作品を通じて言葉や音として記録され、絵画作品を通じて視覚化され、共有されてきた

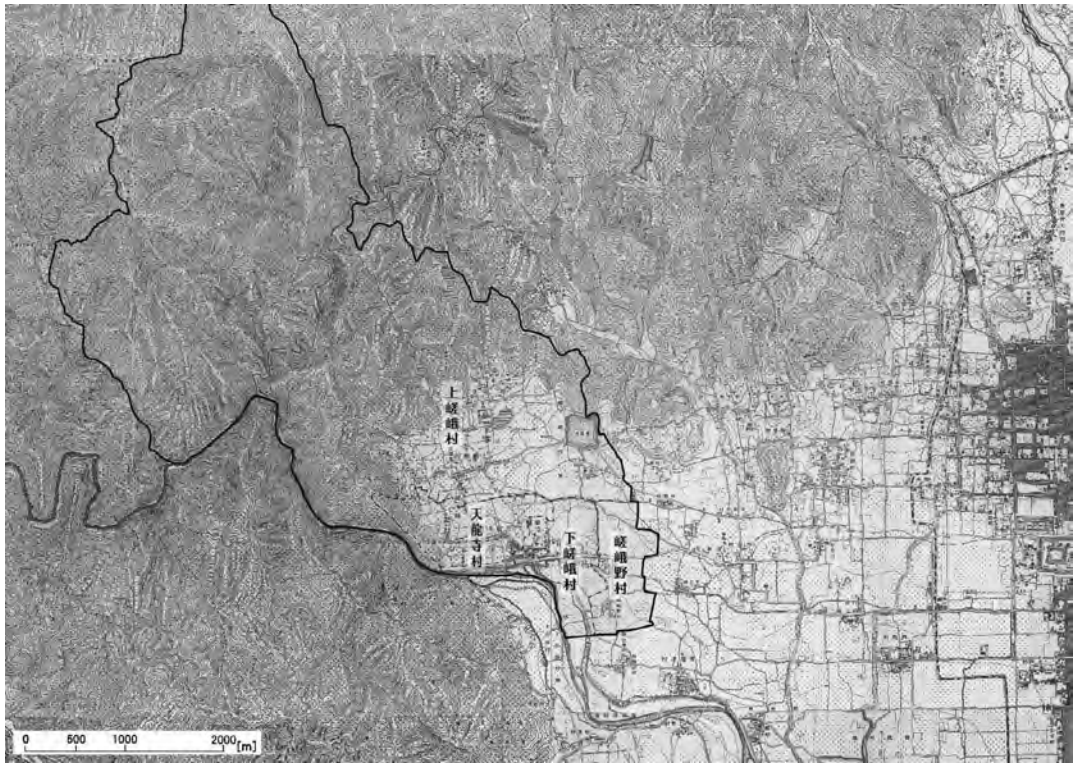


図2 嵯峨野ととらえられてきた地域

注) 明治22年測量2万分の1地形図京都北部、京都南部、嵯峨をベースとし、旧4村の区域は京都市(1994)付図を参照した。

といってもよい。ことに、近世日本においては、社会的地位にあるものや教養を志向する一部の人々の内輪のネットワークの中での共有にとどまらず、不特定な一般大衆をその読者とする刊行物としての地理的メディアが数多制作され、社会経済のなかで商業ベースで流通し、様々なカタチで利用されてきたことは周知の通りである。

本稿では、近世名所地誌本の先駆けと評価されている山本泰順『洛陽名所集』(1658年刊)を分析対象とし、歴史地理的なまなざしを有し、地理的メディアの編纂実践を通じて、直接的にも間接的にも読者をその場所へ誘う役割を担った近世知識人層による「嵯峨野」地域をめぐるまなざしや場所認識に対する考察に向けた情報整理を目的とする。

## Ⅱ. 近世における名所をめぐるまなざしと名所地誌本の編纂実践

そもそも《名所》とは、万葉集依頼、和歌に詠まれる歌枕としての「ナドコロ」が原意とされ、貴族社会を中心に教養に基づいた場所認識が共有されていくなかで構築された心象風景であった。これらは、中世を通じて社会的文化的文脈のなかで、名所をめぐる対象が拡大され、場所をめぐる認識が変容していく(長谷川2020)。近世における「名所観」というべき、名所をめぐるまなざしや場所認識、生産(再生産)される場所イメージに関

する先行研究の成果と課題については、長谷川（2012、2019、2020）を参照されたい。

林屋（1953）は、近世転換期における都市空間の記録や都市生活を叙述する地理的メディアの特徴について、17世紀半ばに三都で出現する都市の《名所》への関心を通じて、近世都市民の生活の歓びを映し出すものと評価している。明暦から寛文頃までを「発展の第1期」ととらえ、京都における名所地誌本の叙述内容の特徴として、「その歴史性から懐旧的な雰囲気醸し出しているものの、必ずしも古い歌枕の名所を訪ねるものではなく、市民の四季折々に群集する寺社や歌舞伎など、遊樂の傾向が濃厚である点において京都のもつ個性を鮮やかに浮かび出させている」と指摘する。これは、名所地誌本が名所という場所の叙述、挿絵による場所の様相を視覚化する作用を持ち、その総体として京都という都市のもつ個性やイメージが浮かび上がることを示唆している。

上杉（2004）は、鈴木（2001）に総括される1970年代後半から90年代の江戸を中心とする名所研究の傾向とその成果を整理し、江戸と上方における歴史的・文化的背景の違いから17世紀の大坂を事例に検討し、以下の2点を指摘している。（1）中世とは異なる近世初頭の名所観が、時代の画期にみられる普遍的傾向であるとし、近世初期の名所観に対する検討の重要性を提示した。さらに、（2）「名所」をめぐる本質論として構成する諸要素は《歌名所》と《俗名所》に分類でき、過去に対するまなざしによって構成される《過去名所》と、現在の様相からなる《現在名所》の2つが存在するという。これは、これまでの名所研究が行動文化に傾倒していたことを批判し、本質論として名所観をとらえたものと評価できる。一方で、石出常軒の寛文4（1664）年の京都における物見遊山と『京童』の関係性を指摘した中村（2004）や、地誌本出版と旅文化の関連性を指摘する神崎（2004）や原（2013）などのように、当該時期の行動文化の中で実用的に利用されていた形跡も確認できる。ことに近世には、多くの人々が遊山のなかで著名な名所とされる場所を巡ったり、文学作品の中に取り込まれていたことを考えれば、当該時期の行動文化という視点を欠いては「名所」をめぐるまなざしやその価値付け、それらを取りまく重層的な諸コンテキストとの関わりをとらえきれない部分があるもの事実といえる。過去遡及的なまなざしをもつ近世地誌のあり方について、米家（2005）は、官選地誌、民間地誌においても共有する性格をもち、その中心には名所や旧跡、歴史的な墳墓や寺社といった「過去」を想起される景観があった指摘している。実際に凡例や序文をみれば、彼らは編纂にあたって、そこに住まう人々に伝承される地域や家の過去、その民俗誌（≡その土地の生活の歴史）を現地見聞と聞き取りによって精力的に収集し、旧記による考証を試みるといった、場所の「過去」をめぐる実証主義的な調査姿勢がみられる（長谷川2009）。

そこで筆者は、近世における「名所」とは、場所や景物がある時点で、誰かに特定の場所認識やまなざしによってその価値が見出されることで生産（再生産）された、あるいは差別化された「場所イメージ」であること。それらは、名所地誌本といったメディアや地



域社会（ホスト）を通じて、旅行者など（ゲスト）に対して、その場所や景物への見方を規定する「フレーム」の役割を担った文化的装置であると定義しておきたい。それゆえに強い地域性をもち、情勢の変化によって価値付けや認識が変化し（広く一般化し定着し）うる流動的な側面がある。このとき、編纂者の場所へのまなざしは、地域外から対象をみる「他所／他者のまなざし」、地域内部から対象をみる「自所／内部のまなざし」、その両方を併せ持つものと考えられる（長谷川 2018）。

さて、管見の限りで近世京都における名所地誌本の編纂／刊行をめぐる動向は、中川喜雲『京童』（1686年刊）以降、近世を通じて、過去の著作の再版や改刻などを含めず、新規の編纂／刊行が計50点ほど確認できる（長谷川 2019）。この種の編纂／刊行をめぐる営為を紐解けば、新たに編纂を試みた知識人たちは過去の名所地誌本の内容をふまえ、既存の知識をベースに新たに見出した場所を名所として位置付けるような慣例があった形跡が窺える。これは、市古（2010）や藤川（2010）が検討したように、当時の出版活動における著作権問題や同種組合の存在などを背景として、新たに名所地誌本を刊行する書肆のもとには、既存の版本と多くの地理的知識の蓄積があったものと容易に推測できる<sup>(1)</sup>。京都を対象とした近世名所地誌本をめぐる系譜論（山近 1999、菅井 1999 ほか）をふまえると、『京童』や黒川道祐の『雍州府志』（1686年刊）など黎明期に成立した名所地誌本は、後続する同系統の刊行物における知的根拠として対して大きな影響力を持つことは明らかである（長谷川 2009、2012、2020）。この点で、林屋（1953）が指摘したように発展第一期に位置付けられ、実用的地誌の機能を持ちつつも、主人公が京童に名所を案内させて京見物をおこなうという文芸的側面が強調される『京童』に比べ、文芸的要素よりも名所に対する講釈をおこなう実用的地誌の側面が強調される山本泰順『洛陽名所集』について検討する意義は大きいと思われる。

### Ⅲ. 山本泰順の人と著作

#### （1）山本泰順とその著作

山本泰順については、例えば、戦前の野間（1940）の論考や熊倉（1967）による寛永文化論のなかで鹿苑寺住職鳳林承章の日記『隔冥記』を手がかりに泰順父子の人物像を考察したものがある。この時点では『浪華十二景』などを著述した大坂の山本洞雲と同一視され、泰順が処刑された寛文9（1669）年以降は大阪に活動の場を移し、洞雲と名を変えて執筆活動をおこなったものとされてきた。安田（1967）は、丹念な史料資批判を通じてこの2人が別人であることを証明し、改めて泰順の人物像に迫っている。市古（1975）は、泰順と『理屈物語』の著者苗村丈伯との同一視についての検討したほか、『京童』の著者中川喜雲と泰順の人物像を比較している（市古 1993、1998）。このように、主として国文

学の視点から研究が進められ、彼の生涯と作品の特徴が整理されてきた。また彼の父親である山本友我は、鹿苑寺住職であった鳳林承章らと交友関係を持ち、彼の日記『隔冥記』にも度々登場する宮廷に出入りする御用絵師であったため、承章や後水尾天皇らの宮廷サロン「寛永文化のネットワーク」に関する研究のなかで、分析対象の一人とされてきた（冷泉 1998）。成澤（1998）は『隔冥記』を紐解き、同ネットワークにおける友我の活動を検討するなかで息子泰順についても言及している。

寛永 13（1636）年に山本友我の息子として生まれた山本泰順は、近江国東浅井郡（現：滋賀県東北部）の出身で、名を尚勝、字は泰順・三径、通称は内蔵助を用いた近世初期の漢学者である。泰順の本家は、近江源氏の出で、山本若狭守利尚が山城の岩倉などを領有し、その孫（泰順には祖父にあたる）富尚の時に牢人となったという。その息子である友我是尚は、狩野派の絵師として江戸で活躍し、35歳の時に上京したと『洛陽名所集』の「岩倉山」にみえる。成澤（1993、1998）によると、友我は寛永 21（1644）年 11 月から鳳林承章と交友関係を持つようになり、その日記『隔冥記』には、彼が承章とその周辺に食い込んでいく様子が具に見てとれるという。この承章を介した交友が拡大し、宮中文化の中心である後水尾院にも知られるところとなり、自作の屏風絵を献上したことで、慶安 1（1648）年には法橋の位が授けられたとされる。正保 2（1645）年 12 月には、細野氏と称していた冷泉為景邸に赴いて知人となるとみられ、この後、為景を師として泰順は漢学及び和歌の勉強を始めているように、友我と為景の出会いは当時 10 才だった泰順にとって、この後の執筆活動を支える《知》の形成という点で大きな意味を持つと思われる。『隔冥記』に泰順の名が初めてみられるのは、正保 4（1647）年の友我宅で催された茶会の記事であり、慶安 3（1650）年以降に本格的に登場するようになるという。

泰順は父友我が属した一級のネットワークのなかであって、父の庇護のもと金銭的に文化的にも極めて恵まれた環境で漢学や和歌に関する知識や素養を収得しながら成長し、次第に周囲に認められるようになっていくという。慶安 5（1652）年に為景の自害後は、松永尺五やその門人の宇都宮遯庵に従ったとされる。その後、『板倉政要』の「山本泰順父子被行死罪之事」にその事件の詳細が残されているように、寛文 9（1669）年、泰順父子のがおこした事件によって、儒者としてあるまじき振舞いとして、34 歳で父と共に洛東栗田口で磔に処されており、山本通春編『文翰雜編』には辞世の漢詩が収められている。当時、彼らの刑死は衝撃的なものであったらしく、「論語読て論語知らず」と取り沙汰されたようで、都の『元禄太平記』（1702 年）にも彼は罪人として地獄にいる儒者として描かれているという。市古（1998）は、松永尺五の『尺五先生全書』「夏日宴遊序」の記述に注目し、この不名誉な事件は周囲の知人達も困惑したようで、松永尺五や宇都宮遯庵には漢詩集は存在するが、泰順や友我との交流を示すものはみられず、彼らとの交流は忌むべきものとして、切り捨てられた可能性を示唆している。そのため、漢学者としての泰順

の名声は伝えられるはずもなく、ただ『洛陽名所集』のみが後々まで発売され、初版にあった自序末の署名は後に削り取られるが、作者名は書籍目録などによって知られ、しかも同書は名所記の嚆矢として記憶に残るものとなったと指摘する。

現在、山本泰順による著作としては以下が確認されている。まず、明暦2(1656)年に京都二条寺町の書肆西田勝兵衛より刊行された兵法書『古今軍林一徳鈔』(18巻20冊)が泰順の著作の初出とされ、彼は20歳であったという。次いで、翌3年には、「節序」をテーマとして中国の漢詩を収録した『節序詩集』(12巻12冊)を刊行されており、寛文7(1667)年版の国立国会図書館本蔵『節序詩集 二 止』の巻末には、「寛文七丁未仲春日 洛下書堂風月梓行」とみえることから、少なくとも京都二条衣棚の書肆風月庄左衛門より再版されていることになる。そして、万治1(1658)年には、後述する『洛陽名所集』(12巻12冊)が刊行されている。寛文8(1668)年に刊行された『四家絶句』という書籍が最後の著作と考えられている。このように泰順の著作を見ると、軍学と漢詩に関係するものが主であり、彼が漢学者として生活していたことがわかる。市古(1993)は、吉弘元常という水戸藩の儒学者が、寛文2(1662)年に、京都の立伯という医師の勧めと、泰順に対する見極め(人柄、学力、冷泉為景の門人であること、著書の多いことなど)から、彼に従学していることから、当時泰順は漢学者として門人を抱え、名声も手にしていた可能性を示唆している。しかし、現在において泰順の漢学者としての業績や名声を見いだせないのは、不名誉な最後に関係することは容易に推測できる。

熊倉(1967)は、明暦・寛文頃には、寛永文化を支えていた高度な教養を継承した啓蒙家たちは、出版ブームの中で、元禄文化の基盤となる幅広い文化社会を用意したという<sup>(2)</sup>。しかし、彼らは民衆と直結しないものであって、泰順の場合も彼の意識は終始「武士」であり、「処士」にあって、転換期を乗り越えられなかった啓蒙家の一人であったと位置付ける。安田(1967)は、泰順にとって絵師である父の存在は所詮は遊民でしかなく、家運再興はあくまでも官途について名を挙げる事であったとする。彼が名所記を書く意味とは、自己の出自を世に知らしめ、己の博識や高い教養を宣伝し、埋もれた家運を再興する手段に過ぎなかった可能性を指摘し、『洛陽名所集』全篇を貫く彼の自我意識によって、他の名所地誌本とは違った作品とならしめたとしつつも、それが弱点であり限界であったと評価している。続けて、泰順には浅井了意や井原西鶴、あるいは芭蕉や近松のように、文芸を生業とし、著作を通じて後世に名を残すという意識をもつことが出来なかったという。これは、熊倉(1967)が指摘する泰順の高い教養を引き継いだ「武士」意識と同様の見解で有り、「町人」である作家とは一線を画していたことにつながるものであろう。この安田(1967)や熊倉(1967)の指摘は、近世最初期の『洛陽名所集』の特性、あるいは彼の名所観を検証するにあたって、実に興味深いものといえる。

## （2）『洛陽名所集』への評価

山本泰順の代表作となった『洛陽名所集』（12巻12冊）は、近世京都における名所地誌本編纂黎明期の名所案内記として重要な意味をもつ（熊倉1967、野間1969）。本書をめぐっては、叢書や資料集に付された調査報告（森1916<sup>(3)</sup>、野間1969、安田1974）。本書の特徴的な部分の中に著者像を解明する鍵を求めた市古（1993、1998）、平成26年度京都府立大学地域貢献型特別研究（ACTR）の研究成果<sup>(4)</sup>などがみられる。

本書は、万治1（1658）年の初版刊行から泰順父子処刑を経た寛文10（1669）年までの10年間で、3度の再版や摺り増しを確認できることから、社会的支持を得ていたものと想像される。熊倉（1967）は、仮名草子を中心とする新しい文芸の流行から生まれたもので、名所記類という出版物も従来にはみられなかった新しい書籍であったとする。ことに、簡易な名所絵や絵入りの名所記類が成立する社会的・文化的背景には、寛永文化の諸相が様々なカタチで影響しているという。さらに、『洛陽名所集』のような文芸的側面よりも実用的な地誌的側面の強い地誌類が刊行販売され始める点に、寛永文化から元禄文化へ移行する明暦・寛文期の文化史上における一つの問題点であると指摘している。そのうえで、本書に先立つ一ヶ月ほど前に刊行された中川喜雲『京童』と比較した場合、はるかに大部で体裁も整っており、名所記の出発点として十分に検討するに値する著作であると評価している。

野間（1969）は、本書に対する総評として、ほぼ順路を追って記載されており、作者による実地巡覧の足跡を示すものとする一方で、しばしば三国の典籍・和歌・詩文等を引用し、「おのれの博学をひけらかしている事」を指摘し、「端的に言えば、本書は洛陽の名所に託して、おのれの存在を内外に宣伝せむとした野心の作である」と述べている。この後、安田（1976）は、泰順自身が身につけた《知》や、彼の知識人としての高い意識を各地の説明叙述のなかにしばしば盛り込んでいる部分に対して、「自己の出自を世に知らしめ、己の博識や高い教養を宣伝し、埋もれた家運を再興する手段に過ぎなかったのではないか。つまり、『洛陽名所集』全篇を貫く彼の自我意識は、それだけに同書を他のいうところの名所記や地誌とは違った破格な作品とならしめた」と評価している。市古（1993、1998）もまた、やはり前者の指摘と同じ部分に着目し、極めて正統な地誌であると評価する一方で、そのオーソドックスな地誌的記述から逸脱している部分（親族、自己と父、師冷泉為景について触れる部分）について、「まさしくこの点にこそ出自の確かさ、師の確かさ、自己の才能の確かさを示して、世に売り込む姿勢が垣間見られる」と泰順の名所案内記編纂姿勢に言及している。

このように、後世にまで長く影響を与えた有能な地誌としての評価と、それを覆うほどの自己顕示欲が目につくという二重の評価は、いずれの先行研究においても共通した評価であり、この点に泰順の本当の出版意図が垣間見られよう。その一方で『洛陽名所集』に



対する分析視点は、本書を叢書に収録するにあたっての書誌情報の整理や著者泰順の人物像に対する検討が主な目的となっており、本研究が注目しているような著者の京名所をめぐる場所認識といったものに対する検討には至っていないのが現状と考えられる。

#### IV. 『洛陽名所集』の特徴

##### (1) 書誌情報

山本泰順が『洛陽名所集』を編纂した時期は、八文字屋五兵衛より中川喜雲撰『京童』が刊行される明暦4(1658)年の前半頃から8月に至る時期に限定できるという。その経緯は、泰順は喜雲が『京童』を著述中であることを知り、それを上回る規模で名所案内記編纂を企画し、自らが資金の提供をするかたちで、出版を前提に企画を進めた可能性が高いとされる(市古1993)。その出版をめぐっては、父友我と交流があった鳳林承章との関係から京都の書肆田原仁兵衛が出版を請け負ったと考えられている。

野間(1969)は、『新修京都叢書』(臨川書店)に本書を収録するにあたり、その書誌情報を整理し、大正5(1916)年の和田萬吉編『古版地誌解題』を典拠とつつ、少なくとも4つ版が存在すると指摘している<sup>(5)</sup>。また、上記の経緯から万治1(1658)年に京都の版司仁兵衛(版木屋田原仁兵衛)版を初版と位置付け、原題のほか、「都物語」、「宮古物語」、「みやこものがたり」、「山城名所記」という別名称が題簽として付与されて刊行されていた形跡を見出している。市古(1993)は、泰順父子の処刑後には、『洛陽名所集』初版にみられた自序末の部分が、削り取られて刊行されていたことを明らかにしている。

##### ① 板屋仁兵衛版(初版)

題簽「洛陽名所集」(「都物語」と書き題簽がみられるものあり)

序「万治元年戊戌八月日 / 山本泰順撰」

刊記「万治元年戊戌仲秋吉辰 / 板司仁兵衛尉幸之刊」

##### ② 無刊記版

題簽「山城名所記」

序(日付・署名ともに削除されたものと、両方完備されたものがあり)

##### ③ 村上次郎右衛門版

題簽「山城名所記」

序「万治元年戊戌八月日」(山本泰順撰は削除されている)

刊記「寛文四年甲辰年初春 / 村上次郎右衛門開板」

##### ④ 永楽屋七郎兵衛版

題簽「山城名所記」



序（日付・署名ともに削除されたものと、日付のみがみられるものあり）

刊記「華雒書林 / 永楽屋 / 七吉兵衛板行」

これに加え現在では、平成 26 年度京都府立大学地域貢献型特別研究（ACTR）の研究成果によって<sup>(6)</sup>によって、刊行された『洛陽名所集』には、上記の 4 版に、以下の 2 つの版を加えた 6 つの版が存在することが明らかにされている<sup>(7)</sup>。

#### ⑤吉田庄左衛門版

万治二年刊行（『新訂増補古版地誌解題』による）

#### ⑥中野小左衛門版

題簽「都物語」

序「万治元年戊戌八月日 / 山本泰順撰」

刊記「寛文十庚戌九月板成 / 書林 洛陽中野小左衛門」

同研究グループによると、これらの諸本には、①、⑥の系列（甲）と、③、④、⑤の系列（乙）に分類されるという。また、初版とされる①板屋仁兵衛版にあった序の書名は、③村上次郎右衛門版の寛文 4（1664）年当初には残されていたが、泰順父子の処刑後の後摺に際して署名だけが削除され、版はそのまま使用された可能性が高いとされている。その一方で、上記③の段階で削除されたはずの署名部分が、⑥中野小左衛門版には備わっているものも確認されているようである。

## （2）本文叙述

まず、『新修京都叢書』に収録された③村上次郎右衛門版および、現在、国立国会図書館のデジタルコレクション<sup>(8)</sup>で公開されている②無刊記版を検討対象として、『洛陽名所集』にみられる京名所に対する整理・検討から地理的メディアとしての特徴を検証する。

泰順がその自序において、「（前略）山城のうち、都のはしばし名にたてる所凡三百有余をあげ、或いは宮寺のもとつかた、人の由来伝ふるを考へ、しかもその所にながめおける代々の歌まで、たづねもとめ、しるし待りて、洛陽名所集となづけて、十二巻とせり（後略）」<sup>(9)</sup>と記すように、山城国全域に点在する 250 か所余の京名所が項目化されているのを確認できる（表 1）。

無刊記版に相当する国立国会図書館蔵『みやこ物語』では、山本泰順の署名と年季がみられる自序が確認できるほか、まず、「洛陽総図」という山城国の概略図が掲載されている。次いで、「洛陽名所集目録」（掲載目録）があり、各巻で紹介される場所が列挙されている。なお、目録にあげられている場所についてみていくと、必ずしも目録と実際の項目

の名称が一致しているわけではないようである<sup>(10)</sup>。次いで、内裏を中心とした公家町の図が掲載され、遷都の略史が提示されている。各場所が名所としてとりあげ始めるのは御所付近の「御霊社」(1)<sup>(11)</sup>に始まり、それ以降は、各巻は概ね地域毎にまとめられ、山城国全域をほぼ網羅するかたちで時折挿絵を交えながら各場所の解説叙述が進んでいくようである。



図3 「洛陽名所集」に掲載される「御霊社」

出典) 国立国会図書館デジタルコレクション

文章中における京名所に対する叙述の構造は、例えば、「御霊社」(図3)のように、巻頭の目録にみられる「御霊社」という名称が示され、その所在地、由緒来歴、祀られる祭神などの諸情報が続けて示されている場合が多い。本稿では、このような場合を《大項目》とみなす。そして、例えば、巻之三の「黒谷」(40)(図4、図5)のように、大項目として黒谷(金戒光明寺)の名称が示され、その所在地と法然上人が開いたという由緒来歴、浄土四ヶ本寺の一つという寺格が示された後に、「浄土橋」、「法然上人墓」、「熊谷入道並平太夫敦盛墓」、「紫雲石」、「萬日寺」といった関連する場所や事柄をとりあげ、それぞれの解説を叙述されている場合も確認できる。巻頭目録にも掲示される名称《大項目》に対して、関連する場所や事柄のほとんどは目録にみられないため、意図的に泰順が区別しているとも推測できる。そこで、目録に確認できないものを《小項目》とする。表1に示すように全12巻を通じて大項目とみなされる名所が計257か所あり、それに小項目を加えると諸氏が言及するように300か所を超え、その多くに和歌や典籍、詩文が添えられ、泰順自身が描いたとされる挿絵も確認できる<sup>(12)</sup>。

まず、《大項目》とみなされる場所やその挿絵について、泰順が名所としてとりあげ、解説／叙述した理由(注目すべき事象や、伝承する場所の物語など)について検討した。ここでは、本文叙述中に語られる内容に対する濃淡の比重と、描かれる挿絵の図像構成要素に着目し、次の(A)～(F)の6つのカテゴリーに分類した。

まず、寺社仏閣の由緒のほか、著名な僧侶や神官など宗教者に関するものなど、宗教的な話題に重きが置かれているものを(A)「寺社／宗教」と分類する場合、大項目としては計103か所がこれに該当する。ついで、近世初期には古跡として認識されていた場所や、その場所の事跡に話題の重きが置かれているものを(B)「古跡」と分類した場合、計47か所となる。そして、当時みられた京の風俗に関するもの、商業店舗などの産業や茶畑や西陣といった生業に関する話題に重きを置かれたものを(C)「風俗／生業」と分類した場合、計5か所が該当する。祭礼や年中行事がおこなわれる場所や、その事柄に関

山本泰順『洛陽名所集』にみる嵯峨野をめぐるまなざし（長谷川奨悟）

表1 『洛陽名所集』に大項目としてとりあげられる場所の一覧

巻之一	[1] 御霊社 [2] 園韓神 [3] 縣宮 [4] 石神 [5] 聖天 [6] 中川 [7] 真如堂 [8] 浄華院 [9] 百万遍 [10] 草堂 [11] 六角堂 [12] 誓願寺 [13] 因幡堂 [14] 新玉津島 [15] 夕顔社 [16] 御影堂 [17] 五条天神 [18] 六波羅 [19] 極楽院 [20] 鹽竈 [21] 金光寺 [22] 妙顯寺 [23] 堀川 [24] 還橋 [25] 耳畝川 [26] 雀杜 [27] 壬生 [28] 本国寺 [29] 本願寺 [30] 水薬師
巻之二	[31] 下賀茂○ [32] 吉田○ [33] 吉田寺 [34] 善正寺 [35] 南禅寺 (○: 東山) [36] 永観堂 (*35) [37] 鹿谷 (*35) [38] 白川 (*35) [39] 浄土寺村 (*35)
巻之三	[40] 黒谷○ [41] 岡崎 [42] 知恩院○ [43] 吉水 (*42) [44] 一心院 (*42) [45] 真葛原 [46] 祇園○ [47] 瘡止地藏 [48] 四条河原 [49] 長楽寺 [50] 丸山 [51] 双林寺 [52] 高台寺 [53] 八坂
巻之四	[54] 清水寺○ [55] 霊山 [56] 鳥邊野山 [57] 大谷 [58] 菊谷 [59] 将軍塚 [60] 歌中山 [61] 牛尾谷 [62] 滑谷 [63] 豊国○ [64] 阿弥陀峯 [65] 大仏殿○ [66] 蓮華王院
巻之五	[67] 泉涌寺○ [68] 新熊野 [69] 清閑寺 [70] 東福寺○ [71] 萬壽寺 [72] 稻荷○ [73] 藤森 [74] 深草 [75] 醍醐○ [76] 笠取山 [77] 山科 [78] 安祥寺 [79] 花山 [80] 伏見○ [81] 御香宮 (*80) [82] 木幡 [83] 小栗栖 [84] 櫃河橋
巻之六	[85] 宇治○ [86] 宇治川橋 (*85) [87] 橋姫 (*85) [88] 欽冬瀬 (*85) [89] 橘小島崎 (*85) [90] 平等院 (*85) [91] 慧心院 (*85) [92] 興聖寺 (*85) [93] 離宮八幡 (*85) [94] 宇治山 (*85) [95] 朝日山 (*85) [96] 榎島 [97] 巨椋 [98] 狹緒河 (澤田川) [99] 八幡○ [100] 石清水 (*99) [101] 放生川 (*99) [102] 八幡山 [103] 男山 [104] 男塚女塚 [105] 狛山野渡 [106] 蟹満寺 [107] 木津川 [108] 柞森山 [109] 瓶原 [110] 衣手森 [111] 井手 [112] 玉井 [113] 玉川 [114] 泉川 [115] 綴喜原宮 [116] 久邇都 [117] 笠置窟
巻之七	[118] 上賀茂○ [119] 齋院 (*118) [120] 齋森 (*118) [121] 一言神 (*118) [122] 賀茂河 [123] 片岡杜 [124] 大宮杜 [125] 長谷 [126] 八鹽岡 [127] 松崎 [128] 櫻井里 [129] 岩倉山 [130] 大原○ [131] 来迎院 [132] 音無瀧 [133] 瀬井清水 [134] 芦生里 [135] 小野 [136] 修学寺 [137] 高野川 [138] 八瀬 [139] 志津原 [140] 寂光院○
巻之八	[141] 岩屋○ [142] 鞍馬寺○ [143] 暗部山 [144] 御菩薩池 [145] 市原 [146] 二瀬 [147] 貴布禰○ [148] 今宮○ [149] 紫野 [150] 大徳寺 (*148) [151] 船岡 (*148) [152] 蓮台野 [153] 蓮台寺 [154] 焰魔堂 (*148) [155] 頭野 [156] 柏森 [157] 雲林院 (*159) [158] 鷹峯 [159] 岩陰○ [160] 水室山 (*159) [161] 平野 (*159) [162] 紙屋河 [163] 柏野 [164] 北山 [165] 鹿苑寺 (*159) [166] 衣笠山 [167] 明王院 (*159) [168] 六所宮 (*159) [169] 天神杜 (*159)
巻之九	[170] 北野○ [171] 内野 [172] 観音寺 (*170) [173] 経王堂 (*170) [174] 遣教経堂 [175] 西方寺 [176] 高雄神護寺○ [177] 地藏院 [178] 榎尾 [179] 梅尾 (○: 等持寺, 龍安寺, 妙心寺) [180] 妙心寺 (*179) [181] 広隆寺 (○: 太秦) [182] 木島
巻之十	[183] 仁和寺○ [184] 大内山 [185] 玉山 [186] 鳴滝 [187] 広沢池 [188] 遍昭寺 [189] 嵯峨○ [190] 清涼寺 (*189) [191] 往生院 (*189) [192] 三宝院 (*189) [193] 寂光寺 (*189) [194] 二尊院 (*189) [195] 小倉峰 (*189) [196] 野宮 (*189) [197] 有栖川 [198] 水尾 (*189) [199] 天龍寺 (*189) [200] 清滝川 [201] 月輪 [202] 橘原 [203] 愛宕 (*189) [204] 鹿背山
巻之十一	[205] 法輪寺○ [206] 桂里 [207] 大井河 (*205) [208] 亀山 [209] 千代古道 [210] 芦河 [211] 嵐山 [212] 戸難瀬瀧 [213] 大沢 [214] 大覚寺 [215] 梅宮○ [216] 梅津川 [217] 松尾○ [218] 西芦精舎 [219] 東寺○ [220] 竹田 [221] 四塚 [222] 秋山 [223] 鳥羽 [224] 戀塚寺 [225] 城南寺 [226] 六田 [227] 横大路 [228] 羽束師杜 [229] 葉室里 [230] 久我森 [231] 箕之里 [232] 西寺 [233] 吉祥院 [234] 多武杜
巻之十二	[235] 大原野○ [236] 小鹽山 (*235) [237] 良岑 (*235) [238] 参鉦寺 (*235) [239] 佐江野沼 [240] 向日明神 [241] 久世 [242] 福田寺 [243] 琴弾橋 [244] 鷺坂 [245] 栗生光明寺 [246] 山崎○ [247] 寶寺 (*246) [248] 勝龍寺 [249] 水無瀬 川山 [250] 廣瀬 [251] 高槻村 [252] 伊勢寺 [253] 淀○ [254] 美豆野 (*253) [255] 大荒木杜 (*253) [256] 浮田杜 [257] 岩田小野

注) 表中の○印は、挿絵が挿入されていることを示し、(\* 数字) は、独立した挿絵ではないが、他の挿絵のなかに紹介されている事を示しており、その数字は挿絵が掲載されている場所を示している。下線は古歌の掲載がみられる場所を示している。

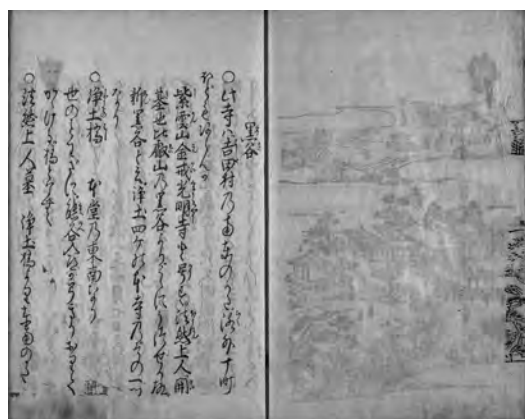


図4 『洛陽名所集』に掲載される「黒谷」

出典) 国立国会図書館デジタルコレクション



図5 『洛陽名所集』に掲載される「黒谷」(挿絵)

出典) 国立国会図書館デジタルコレクション

する話題に比重が置かれているものを (D)「祭礼／行事」とする場合、1 か所でみられる。その場所の地勢や概説、古歌の掲載に重きが置かれているものを (E)「地理／景観」とすると、計 100 か所がこれに該当する。最後に、上記に分類できないものを (F)「その他」とすると、1 か所がこれに該当する (表 2)。

本書においてとりあげられる場所や事柄の叙述内容には、相当のばらつきがみられるが、上記のカテゴリーに分類すると、大項目とみなされる場所の多くは、著名な寺社や霊地、宗教者の事跡に関する事柄となる。しかしこれは、『洛陽名所集』のみにみられる特徴ではなく、同様の分析にした場合、中川喜雲『京童』や黒川道祐『雍州府志』など、近世初期名所地誌本に共通する特徴の一つといえる。その社会的背景には、京都には大規模かつ壮麗な著名な寺社が集中し、既に拝観料を徴収して一般公開する寺社がみられたほか、幕府の寺社政策の一環としての 17 世紀の寺社再建の建築ブームなどを背景に整備されつつあった宗教都市として性格を現していると考えられる (京都市 1972)。このような編纂実践と読者の需要に関する社会・地域的文脈には、川嶋 (1999) が指摘するように、室町期以降の京都において、経済発展を背景とした町衆の非日常性の希求を背景とする寺社への信仰や参詣行為、余暇を利用した能や歌舞伎などの鑑賞や物見遊山といった行動文化の発展が強く関係するものと推測できる。

次いで、大項目としては計 47 か所が該当する (B)「古跡」と分類できるような場所や事柄では、その場所に伝承される場所の物語や、過去の事情についてを叙述するにあたって、多くの典籍や旧記が引用されるなど、泰順の博学を示すための熱心さが認められる (市古 1993)。ここでの内容の多くは、本来あるべき地誌には不要なものとみなされる個人的な叙述である (1) 自己の親族の遺跡に関するもの。(2) 父友我の和歌、逸話などに類するもの。(3) 師である冷泉為景に関する叙述も多くみられるのが特徴といえる。これらの個人的な事柄によって場所がみいだされ、名所とみなされる事例は、後の『雍州



表2 洛陽名所集にみられる内容分類

分類	総数	区分	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二
A) 寺社／宗教	103	本文	19	5	9	5	9	8	4	12	11	8	7	6
		挿絵		2	3	2	4	1	2	3	3	1	4	
B) 古跡	47	本文	5	1	1	3	5	5	4	6		6	7	4
		挿絵												
C) 風俗／生業	5	本文	1		1	1				1			1	
		挿絵											△	
D) 祭礼／行事	1	本文							1					
		挿絵				△					△			
E) 地理／景観	100	本文	5	3	3	4	4	20	13	10	2	8	15	13
		挿絵		1		1	1	1	1	2	1	1		3
F) その他	1	本文							1					
		挿絵												

注) 表中の△印は、別の分類で描かれる挿絵の中にモチーフとして描きこまれているものを示す

府志』や『都名所図会』などにはみられない特徴であり、たとえ場所の叙述のなかにみられたとしても、それは場所の由緒や過去の事象の叙述から派生した話題であり、どちらかというところ、附記に近いものであったといえる。ここにみられる明確な自己主張の側面は、泰順ほど強く主張していないものの、喜雲にもみられるものであり、初期名所地誌本の編纂実践の特徴の一つと思われる<sup>(13)</sup>。

次いで、上記6つのカテゴリーにおいて(C)「風俗／生業」と分類できるような、その土地の風俗や生業に関する事柄を主たる要素としているものは、全体でみれば約2パーセントと少ないようである。このうち、例えば、巻之一「御影堂」(16)では、「扇子折名所也」と、御影堂の扇子折の話題や、巻之三「四条河原」(48)では、人形浄瑠璃や歌舞伎に対する解説と、多くの人々で賑わう盛り場であったことが叙述されている。また、巻之十一「桂里」(206)では、三十六歌仙の一人、伊勢や藤原為家が残した和歌を紹介したあとに、彼は祖母から聞いたという、婚礼をあげる家に出向き祝言を述べる桂女の風俗に関する叙述がみられる。この他にも、例えば、「大堰川」(207)は、別に比重の高い要素によって名所とされる場所であるが、その解説叙述中は、多くの人々が訪れる行楽地であることや、大堰川の筏流しに関する記述、鮎漁といった嵯峨野の生業に対する多少の言及がみられる場合も確認できる。そして、風俗や生業については、過去への言及もみられるものの、その多くが現在の様相が叙述される場合が多いようである。

また、近世地誌編纂黎明期の編纂実践には、編纂者がその場所に注目し、名所として価値付ける理由の一つとして、中世的名所観を引き継いだ名所（ナドコロ）をめぐる共通意識が強く関係している場合もある（長谷川 2020）。そこで、取りあげられる場所に対する説明叙述にみられる和歌や漢詩等の引用・掲載の状況について確認すると、(A)「寺社／宗教」では計24か所、(B)「古跡」では計20か所でみられる。そして、(C)「風俗／生

業」、(D)「祭礼／行事」、(F)「その他」では、それぞれ1か所ずつに古歌の引用がみられる。ことに、(E)「地理／景観」と分類できる計100か所では、全体の約7割におよぶ73か所におよび、6つのカテゴリーのなかで最も多くの場所において古歌の引用が確認できる。

これらには巻之十二に収録されている「浮田社」(256)や「岩田小野」(257)のように既に実態をとまなわず、当該時期には歌枕の一つとして知られていた場所や、古歌にまつわる事跡についても名所と認識していたことがうかがえる。これについて市古(1993)は、本書の巻之十一「梅津川」(216)にみられる叙述表現は、当時みられた歌枕に関する書籍にみられる常套句的方法であったと指摘している。したがって、(E)「地理／景観」と分類できる場所の多くでは、その場所への注目点を叙述するのではなく、古歌を数種引用することで、上杉(2004)が指摘する〈歌名所〉として表現した可能性が考えられよう。それらを地域別に検証すると、山城北部(葛野、愛宕の両北部)と、西山から山城南部にかけて多くみられる傾向がある。これらは、北部は平安期以降のものが多く、平安貴族の興楽地であり、多くの和歌や詩文が詠まれたことに関連し、南部では平安期以前のものである。これらの場所や景物をめぐって、泰順は場所の由緒や物語といったものではなく、歌枕としての概念的、あるいは知識としての和歌名所として、その場所をとりあげているものと推測できる。さらに、市古(1993)は、『洛陽名所集』の古歌と、和歌の手引きとして普及していた『類字和歌集』の山城部分にあげられている和歌と比較した場合、その多くが一致すると指摘している。これらの和歌や典籍の典拠については、師である為景所有の史料に依拠している可能性を示唆するとともに、一般的な歌枕に関する書籍に依らない部分は、和歌に関する学識を誇示するとともに、為景との師弟関係を強調する狙いがあったとする。

### (3) 挿絵の特徴とその構造

『洛陽名所集』に計37図掲載されている挿絵についてみると、例えば上述した「黒谷」(図5)のように、一つの寺社境内を俯瞰した構図で描いたもので、(A)「寺社／宗教」と分類できるものが計25図確認できる。そして、巻之十にみえる「嵯峨」(189)などように、複数の寺社と周辺に位置する景物を一つの挿絵内に再構成したもので、(E)「地理／景観」と分類できるものが計12図確認でき、本書挿絵の描き方にはこの2つのパターンが存在するようである。

上述した6つのカテゴリーにおいて、(B)「古跡」と分類できるような、その場所に伝わる「過去の物語」が図像化されたような事例はみられない。さらに、(C)「風俗／生業」や、(D)「祭礼／行事」といった地域の民俗誌が視覚的に表現されたていものも確認できない。ただし、これらの主題については、例えば、巻之四の「大仏殿」(64)周辺

を描いた挿絵の中央右側にみられる三十三間堂の「通し矢」の様子を描写。巻之九の「北野」(170)の挿絵の東下隅にみられる「競馬」の描写。そして、巻之十の「嵯峨」(図6)を描く挿絵の中に大堰川の筏流しの様子が小さく描き込まれていることは確認できるものの、この3事例もまた、挿絵を構成する要素の一つとして僅かに描写されているにすぎず、これをもって (C) や (D) に分類できるほど挿絵の構図中の比重は大きくはない。これらは、古田(2020)が指摘するように、中川喜雲『京童』みられる本文叙述にみられる「雅」の描写と、挿絵にみられる「俗」の描写という本文叙述と挿絵の役割分担の構想や、挿絵による民俗誌の可視化に対しては、ほとんど意識されていなかった可能性が高いと思われる(長谷川2020)。

挿絵の構図についてみると、まず、(A)「寺社／宗教」を主題に挿絵を描く場合、全ての場所において、上空に設定された視点から境内地を俯瞰した構図で描かれており、例えば『京童』の挿絵にみられるような、頭上近くに設定された視点からの近景描写を用いて、祀られる神仏に関する霊験譚の図像化を意図したような挿絵は確認できない(長谷川2020)。このとき場所を眺める視点と描かれる空間の関係は、上空に設定された視点から対象地を俯瞰したもので、その場所の空間的広がりや把握をさせるような遠景の俯瞰図に近いといえる。これは、18世紀末の秋里籬島『都名所図会』が名所空間のもつ《趣》を読者に把握させるための試みとして実践し、それを継承した19世紀の「名所図会」資料のように、凡例や跋文などに挿絵の見方や空間スケールの指標が示されるといったように、明確に挿絵を重要視したものではない(長谷川2012)。後世の「名所図会」資料では、空間の広さを示す指標として、あるいは風俗祭礼や盛り場の様相や趣向を視覚的に表現するツールとして、また伝承される過去の物語を可視化する場面において、様々に工夫された人物描写が用いられることが多い(長谷川2012)。また、このような人物描写が採用されることについては、例えば、下坂(2003)は、寺社参詣曼荼羅の場合、描かれる場所と

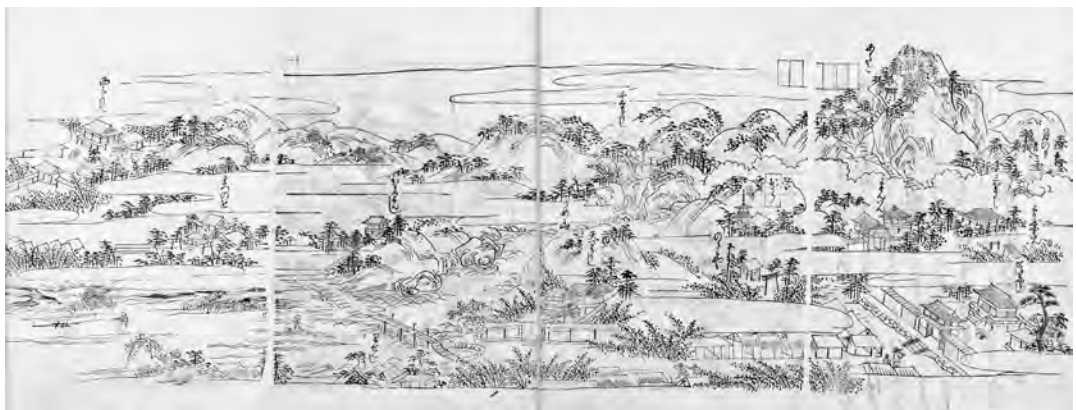


図6 『洛陽名所集』に掲載される「嵯峨」(挿絵)

出典) 国立国会図書館デジタルコレクション

人物描写など個別図像の組合せによって、その場所性や霊験譚などを表現し、庶民に対しては勧進聖の絵解きが重要な役割を担ったことを指摘している。また、馬淵(2011)は、個別の形象がそれ自体でその場所の意味や霊験譚などを示す明示的意味(denotation)と全体の中にあってその文脈から意味を得られる暗示的意味(connotation)が存在し、個別の形象の集合体が作品であり、それらが集まることで絵(形象)として新たな言説(≡内容)を表現する新たな意味を持つといい、記号論的解釈の重要性を指摘している。これは、宗教的要素の絵画にのみにみられるのではなく、例えば洛中洛図屏風など都市風俗図や場所を描く浮世絵など地理的メディアに対する分析にも援用できるものである(長谷川・網島 2019)。『洛陽名所集』の場合、挿絵中に描かれる人物表現をみると、上述したように挿絵の構図は、対象地(寺社境内)を上空からの俯瞰したカタチで境内の主要な建築物や事柄が描かれているため、近景による着物の柄や生別などの情報が読み取れるような詳細な描写はみられず、人物像はごく簡略化され、モチーフ化された形象として境内に配置されているものと、もしくは全く確認できないものとが混在しており、境内の規模などで描き分けられているわけでもなさそうである。

また、寺社を描く挿絵には、寺社門前や境内における喫茶や酒宴の様子とおもわれる集団のモチーフが描かれている事例も確認できる。これらについて、村井(2002)の指摘によれば、寺社参詣や遊楽という非日常生活や空間の中で、喫茶や酒宴が当時の人々の中でハレのものと考えられていたことに由来するもので、近世初期には既によくみられた風景の一部であったと推測できる。またこれらは、名所案内記の挿絵と屏風など絵が描かれるカンヴァスの大きさや手書き彩色と版本という違いがあれど、当時盛んに制作された都市風俗図中にみられる構図の個別描写と類似するものであり、例えば『京童』に掲載される挿絵にもみられる特徴であったように、都市風俗図と名所地誌本や絵図といった地理的メディアは相互に影響関係をもっている(長谷川 2020)。これらを制作背景として、日本絵画における先行図様の利用の在り方の多様性を馬淵(2011)が指摘するように、都市風俗図などの画面中にみられる喫茶や酒宴の様子を描く場面を「粉本」もしくは、ある種の《型》として定型化されたモチーフとして、泰順が自身の挿絵中に「引用」や「転用」している可能性も考えられる。

また、上述した「黒谷」(図5)の挿絵中にみられるような、「雲形」の描写も随所に用いられている事が確認できる。これは、長谷川・網島(2019)において述べたように、都市風俗図において、日本絵画における伝統的手法である「やすり霞」や「雲形」を用いる場合、画家が必要としない空間(建物や通り)を遮蔽・省略するほか、地理的位置関係の調整、場面転換に用いられる他、奥行き感やリズム感を演出する画家の工夫とされる。これらは、平安末期以降、やまと絵の技法として確立されてきたもので、泰順が『洛陽名所集』に掲載する挿絵も自ら描いた背景には、絵師であった父友我の存在があったと思われる。



る。友我は狩野派にその技法を学んだとされ、御用絵師として寛永文化のネットワークの中で活動する彼の元には、作品創作のために必要な様々な模写や粉本、図案や知識があったはずである。泰順にとってその環境は、絵画をみる知識や技法、鑑賞評価の知的源泉となったものと推測でき、既に粉本やスケッチされ、定型化された風景の構図を援用するかたちで、自身の作品中に掲載する挿絵を描いたものと評価できる。

この点でみれば、泰順が実際に目にした实景に近い姿で描き、構図を再構成した空間の可視化というよりは、むしろ、実際に彼自身がそれなりに描いてみせることで、伝統的な知識や手法といった教養の広さを、他者に対して披露しているようにも思えてくる。つまり、泰順にとっての挿絵の存在について考えた場合、その作品中における比重は低く、挿絵という視覚的表現を用いてその場所にみられる事柄の様相や意味などを読者に伝えようとしたというよりは、まさに文章叙述の合間に差し挟んだ寺社のスケッチ（挿絵）であり、自身の教養の広さを醸し出す手段であったものと推測できよう。

## V. 嵯峨野をめぐるまなざし

### （1）地域概要

京都市（1994）によれば、「嵯峨」「嵯峨野」と括られる空間について歴史的にみれば、近代初頭の旧4か村（嵯峨野村・下嵯峨村・天龍寺村・上嵯峨村）を含む地域を、「嵯峨」という概念で捉えられてきたという<sup>(14)</sup>。広域名称としての「嵯峨」という名称は、唐の都長安の郊外にあって景勝地としてよく知られた嵯峨山の名を移したとも、背面の山々の地が「<sup>さが</sup>険しい」ことから派生し、漢字の嵯峨に形容するようになったともいわれている。

嵯峨野と宇多野を合わせて考えれば、当館周辺でも稲荷古墳や嵯峨七ツ塚古墳群が現存するように、6世紀から7世紀初頭に嵯峨野には数多くの古墳が作られ、その中心部には太秦蜂ヶ岡を拠点とした秦氏一族の墓と考えられる、6世紀のものとしては全国有数の古墳群が出現するという（さらんネット2018）。太秦を拠点に葛野川（大堰川）に大堰に設け、嵯峨野一帯を開発した秦氏によって飛鳥時代以降には広隆寺や蚕の社、松尾大社といった秦氏縁の大規模な寺社が建造されるなど、人里としての嵯峨野の開発が進んでいく（村井1982）。

京都市（1994）によると、平安時代には嵐山に「大堰津」が整備され、丹波から筏流しで運ばれた木材が津で陸揚げされ、そこから陸路で平安京まで運ばれたように、大都市京都への水運を利用した物資（木材）の集積地としての原型がみられるようになる。また、二条大路から大炊御門大路が大堰まで通じていたことで桓武天皇など歴代天皇が大堰河畔に度々行幸したといい、近年の発掘調査によって大堰離宮跡遺構などが確認されている。平安前期から嵯峨野は「西郊」として、天皇の禁野、風光明媚な行楽地として宮廷人

たちからまなごされ、嵯峨天皇の嵯峨離宮（現：大覚寺）や、源融の山莊棲霞観（現：清凉寺）などの山莊や関連寺院が建造されたほか、御室の仁和寺や広沢池湖畔の遍照寺など大規模寺院が建立など積極的な開発が進められたとされる。平安中期から後期には、これらの山莊は衰退し、その一部は大覚寺や清凉寺のような寺院となり、平安後期には、浄土信仰の浸透や愛宕信仰の広がりにより清凉寺や化野念仏寺などが立地する嵯峨野は念仏者や隠棲者の里として知られるようになるという。鎌倉初期の藤原定家による小倉山莊造営や、13世紀中葉には後嵯峨上皇の離宮亀山殿（現：天龍寺）や付随する施設を造成、整備など大規模開発がなれている。また、都と嵯峨をつなぐ嵯峨野大路など主要道路が整備されたことで、その周辺部には在家の増加がみられるほか、大堰川水運の活発化もあいまって当該地域は下嵯峨を中心に都市的発展がみられるとされる。

山田（2007）は、中世の京都を検討するにあたっての重要な視点として、洛中周辺部に「衛星都市」が群在し、それらが洛中との有機的関連性をもちながら「巨大都市複合体」とよぶべき、壮大な都市圏を作り上げていた可能性を指摘している。ことに、下嵯峨を中心とした嵯峨の地は、平安京遷都から今日に至るまで、京都都市圏を支える後背地（hinterland）の一つであったとし、中世には後嵯峨天皇や亀山法皇の離宮亀山殿の造営にはじまり、その後は天龍寺や臨川寺を始めとする大規模な禅宗寺院群が立ち並ぶ「宗教都市」といえるような盛況を呈していた。この点において、嵯峨の地が中世京都の「巨大都市複合体」を構成する最も重要な都市の一つであると位置付け、室町期中世都市嵯峨の総面積は、周辺に位置する大覚寺とその関連空間をも含めた場合、少なくとも170万平方メートルにおよび、そこで暮らしを営んだ人口は少なくとも8000人ほど、場合によっては1万人ほどになると想定している。

その後、応仁・文明の乱によって、嵐山山上にあった嵐山城<sup>(15)</sup>が落城したほか、渡月橋が焼け落ちたりと、この騒乱によって都市の中心部である天龍寺・臨川寺などの大規模寺院のほか、周辺部の大覚寺なども兵火によって焼失したことで、都市としての嵯峨は衰退したとされる。近世に至ると慶長11（1606）年の角倉了以による保津川（大堰川）開削工事によって水運による物流効率が増し、筏流しで運ばれる木材に加え、米や野菜などもより安全に丹波から運ばれるようになったとされる。CDI（1973）によると、嵯峨野には木材や薪を扱う問屋も集まるようになり、京都に運ばれる物資の集積地機能を強化していくという。また、中世末期から京都周辺部で生産される野菜の一部が「名物」とみなされるようになり、その生産量は近世を通じて増加する傾向にあったといい、近世後期には約40万人と推定される京都市中の人々に供給されていたようである。嵯峨野をみれば、広沢池や大沢池のジュンサイや松茸、嵯峨の柚や林檎、葡萄、花園の蕪菁といった産物があげられるように都市近郊の耕作地としての場であり、『元禄十四年實測大絵図』や『天明六年京都洛中洛外絵図』などの絵図資料には、村々の集落背後には松山竹林が広がる里

山の景観を確認できる。保津川では、鮎もどきや鯉、鱒といった川魚が「名物」とされ、この漁業風景は、地域を代表する風景として洛中洛外図屏風など様々な都市風俗図のなかに描写されているほか、あるいは『京童』（図7）など名所案内記の挿絵によって視覚化に紹介されている（長谷川・網島 2019、長谷川 2020）。

このように地域を概観すると、近世嵯峨野の地域的特徴を構成する要素は主として以下4つに集約できよう。（1）古代以来、天皇や貴族階級がその自然美に着目し、嵯峨野を西郊の遊樂地とみなし、開発していったように近世に至るまでの都と深い関係性を持つ歴史性。（2）大規模な本山クラスの寺院、著名な神社の建造に加え、愛宕信仰や清凉寺の大念佛会などに代表される宗教性。（3）四季の中で、京内外の貴賤様々な人々が、飲酒や享樂をおこなった遊樂地としての性格。（4）大堰川の水運を利用した物流の集積地、大都市京都市中へ供給する食糧生産地としての性格があげられる。これらが都市京都との関係性の中で構築され、重層的に結びついていると考えられる。



図7『京童』に描かれる「大井川」（挿絵）

出典）国立公文書館デジタルアーカイブ

## （2）とりあげられる嵯峨野

近世における嵯峨野における名所や風景へのまなざしをめぐる検討については、例えば、山口ほか（2010）は、近世の紀行文にみられる風景記述を分析し、嵯峨野における風景の重層性が見られる要因として、和歌や物語などにみられる文学的イメージが時代を超えて継承されていたこと、それに合致する実際の景観が残されていたことをあげる。そして、文学的イメージの追体験が風景の多様性を生んでいたといい、それらを背景として多様な風景鑑賞の在り方があったことを指摘している。また、谷崎（2017）は、武士や知識人層が残した紀行文や道中記を事例に名所の選択に生じる差異や要因を分析し、訪問者の居住地の違いにより京都における物見遊山で訪れる場所に違いを見出している。ことに、嵯峨野における名所めぐりの目的地の選定やそこでのまなざしについて、例えば、古歌や物語など文学的な名所の場所性を享受するための知識や教養の差によって、網羅的にめぐる傾向がある学者など「知識人」的性格が強い江戸居住者と、ある程度定型化されたルー

トでめぐる傾向がある農村名主などを含む江戸近郊に住まう「庶民」では、その行動や訪問動機が異なることを指摘している。これらの分析は、近世を通じて残された資料を用いたものであるほか、資料的性格から江戸在住者や地方に住まう者の京都での行動であり、「外部／他者」のまなざしによって京名所を認識していると評価できる。泰順の場合、京都在住者であり、嵯峨野をめぐるまなざしは、山城国という広域な視点でみれば、都市近郊に位置する嵯峨野に対しては「自所／内部」のまなざしをもち、一方では、普段は都市内部で生活しているため、少なからず「外部／他者」のまなざしをもつともいえ、この両方を持ち合わせていると考えられる。また、『洛陽名所集』は、他者（読者）に対して、自身が紹介する名所の見方を提起する作用を持つ名所案内記であり、その編纂者である泰順は名所めぐるまなざしを創る側の人間でもある。この点において分析対象の性格が異なっているが、両者の分析は嵯峨野における風景の享受や名所をめぐるまなざしを検討するうえで大変興味深い指摘といえる。

『洛陽名所集』において、嵯峨野地域に関する場所や事柄について大項目とみなせるものは、巻之十の「広沢池」(187)から「鹿背山」(204)までの計18か所<sup>(16)</sup>。巻之十一では、冒頭の「法輪寺」(205)から「大覚寺」(214)までで、大堰川の対岸に位置する「桂里」(206)を除いた場合、計9か所が確認でき、二巻にわたって都合27か所がとりあげられている。これに「広沢池」(187)にみられる、平安時代の観賢僧正ゆかりの「座禅石」と「兒石」、古跡としての「帯取池」、巻之十一「法輪寺」(205)における「落星井」、「嵐山」(211)にみられる角倉了以ゆかりの「千光寺」、「戸難瀬瀧」(212)にみられる櫻町中納言成範の娘子督に関する事跡「小督桜」という6つの小項目を加えれば、計33の場所や事柄となる。この地域で掲載される挿絵は、巻之十「嵯峨」(189) (図6)と巻之十一「法輪寺」(図8)の2図を確認できる。

上記について、泰順がその場所やそこにまつわる事象を名所として価値付け、解説／叙述した理由について検討した6つのカテゴリーでみれば、(A)「寺社／宗教」と分類できる場所は、計12か所（大項目：8か所／小項目：4か所、以下では数字のみを記する）となる。次いで、(B)「古跡」と分類できるものが、計9か所（大：8／小：1）にみられる。そして、歌名所などを含む(E)「地理」と分類できる場所が大項目のみで11か所（大：8）を確認できる。上述した6つのカテゴリーのうち(C)「風俗／生業」、(D)「祭礼／行事」に注目してとりあげられる場所はみられない。しかし、「大堰川」(207)の解説叙述には、現在でも多くの人々が訪れて酒宴など行楽地としての叙述や、大堰川の筏流しによる木材輸送について、鮎漁といった嵯峨野の生業に対する言及もみられる。しかし、平安時代の延喜帝（醍醐天皇）や白河院（白河法皇）の大堰川御幸に関する事跡についての言及が叙述の大半を占め、加えて泰順自身が詠んだ詩や、自身に対する懐述によって構成されているため、最も叙述中の割合が高いものでみれば、(B)「古跡」に分類



される。また、卷之十「清滝川」(200)には、「愛宕まうでの人々かならず此の川にて垢離しふかく信念する事なり」と愛宕詣での風俗が紹介されるものの、この場所で詠まれた俊成や西行らの古歌を3首とりあげるなど、叙述中に占める割合の比重でみれば、歌名所としての性格がつよいことから、(E)「地理」に分類される。

例えば、卷之十「嵯峨」(189)では、「この所は、洛陽より二里ばかり西にて、上下の二所有里村広く猶もにぎはしく、いやしからぬ住居ども見えけり」と、上嵯峨村、下嵯峨村は賑わっており、立派な住宅もみられるという。また、「この所名所おほく代々の人いろいろのながめし、詩歌に入、だだに見やりがたき事どもなりけらし」とあり、ここには多くの名所が存在し、歴史的にみれば様々な人々に注目され、多くの詩歌が創作されてきたことが示されている。そして、慶安5（1652）年の夏、師である冷泉為景が嵯峨野の知還軒で後光明院の勅定による書物編纂の作業おこなった際に泰順が従い、その折の漢詩創作のやり取りを懐述している。そして最後に、父である法橋友我がこの地で遊興をおこない、酒宴をしながらこの地でみられる十景の詩を数首詠んだこと、父は詩歌の詠み方や心得を得ていたと述べる。このような、師為景に関する叙述は「広沢池」(187)にもみられるように、嵯峨野地域は、多くの古歌が詠まれてきた環境の良さからや、師為景や父友我の事跡など、泰順自身と関係の深い場所であることが示されている。

また卷十一の「嵐山」(211)では、まず所在地を示し、西行法師が詠んだ和歌を解説し、『玉葉集』（1312年頃成立）所収の藤原俊成の和歌、『続千載集』（1320年成立）にみられる藤原為氏の和歌を解説する。これにちなみ、本当に託宣の身となってただ閑寂な境涯を求めるならば、理想的な場所は他にはない。春秋の眺めはすばらしく、文事の素材となることも多く、他に代えがたいものだ、嵐山の環境の良さを評価している。この泰順の評価は、山本ほか（2010）が指摘するように、古歌に依拠する文学イメージや伝統的な心的イメージを眼下の景観に重ねたものととらえることができよう。

このようにみれば、泰順は嵯峨野の地において現在みられる様子にも目配せをしつつも、そのまなざしの大半は、谷崎（2017）が指摘するように、知識人としてふるまうべく身につけた教養によって見いだせる過去の物語の可視化を指向しており、伝承される寺社縁起や宗教者をめぐる物語を叙述し、かつての天皇行幸や貴族の遊楽地としての古跡、ないし歌名所としての歴史的事跡を確認し、そこで詠まれた古歌について解説している場面



図8 『洛陽名所集』に掲載される「法輪寺」(挿絵)  
出典) 国立国会図書館デジタルコレクション

が多いようである。

## VI. まとめにかえて

本稿は、近世名所地誌本の先駆けの作品の一つとして高く評価されている万治1 (1658) 年に刊行された山本泰順『洛陽名所集』を事例に、近世知識人層による「嵯峨野」地域をめぐるまなざしや場所認識に対する考察に向けた情報整理をおこなったものである。

まず、本書における本文叙述や掲載される挿絵をみれば、当時の京都で整備されつつあった宗教都市としての京の様相や、非日常性を希求する町衆の行動心理といった社会的背景に著名な寺社や霊地など宗教的な事柄を持つ場所が多くみられる。そして、実地見聞や旧記の照会をおこないながら、古跡を熱心に探求する歴史地理的なまなざしの実践と、自己の教養の高さや漢学者としての立場が示されるなど、世に名をあげるという意識もうかがえるものであったと評価できる。また、四季をめぐる町衆の名所観の形成過程とその知識の需要を一つの社会的背景に、寛永文化のネットワークのなかで漢学者としての振る舞いに必要な教養であった古歌に対する知識に基づく「歌名所」を重要視していたことがみてとれよう。これらは、川嶋 (1999) が指摘するように、古くから歌が詠まれた歌名所の系譜として、あるいは室町期以降、連歌や俳諧の題材となるなど、既に成立しつつあった町衆が実際に訪れる対象としての花や四季をめぐる景勝地イメージの生産 (ないし再生産) の側面としてもとらえることができよう。この傾向は、鶴見 (1940) が指摘していたように、過去に対して熱心に探求した過去の可視化の実践といえ、場所をめぐるまなざしは極めて人文的な捉え方であったといえる。

また、泰順らが見いだし、近世名所地誌本におけるまなざしの再生産を通じて名所として一般化される場所は、同時期の『京童』を事例として長谷川 (2020) でも言及したように、近世を通じて紀行文や道中記など当時の資料からも明確に「名所」あるいは「名勝」として知識人層のみならず、一般大衆にまで定着するに至り、その場所は多く人々で賑わう観光地化していく場所もある (青柳 2002)。そして、後世にみられるようになる現況をとらえた種々の名所や民俗的な特長をもつ「京都らしさ」という都市表象や、「京都」に対するホームとしてのアイデンティティが形成されるのが18世紀以降であったという鎌田 (2005) の指摘を考えれば、その前段階といえる17世紀中頃の時点では、一般庶民が訪れる対象としての「俗名所」や、現在の様相に場所や風景の価値を見出す「現在名所」のような、後世に多様化する名所をめぐる場所認識の兆候はみられだすものの、はっきりと意識されるには至ってなかったと思われる。また、泰順の場合、熊倉 (1967) が指摘するように、寛永文化において形成された高い教養を引き継いだ啓蒙家的指向を持ち、士官を目指した「武士」意識による見解の表れとも考えることもできよう。

上記の心的背景により編纂された『洛陽名所集』において、卷之十および卷之十一にとりあげられる嵯峨野をめぐるまなざしは、17世紀半ば既にみられる現況にも目配せをしつつも、高い教養によって見いだせる過去の物語に対する詳細な叙述を指向しており、伝承される寺社縁起や宗教者をめぐる物語の可視化、かつての天皇行幸や貴族の遊楽地としての事跡や、歌名所としての歴史・文化的事跡を確認している。また、そこで詠まれた古歌について解説している場面が多く、師である為景や高度な文化的ネットワークの中で身につけた知識に基づいて、伝統的な名所観である歌名所の系譜を明確にひきうけるものと評価できよう。

しかし、本書を事例に見出した山本泰順の嵯峨野をめぐるまなざしをもって、近世知識人層の嵯峨野をめぐるまなざしととらえるには些か早計であり、これを詳らかにするにあたっての同時期の京都に在住の知識人層が残した日記や名所地誌本の分析、寛永文化のネットワーク内で活動したものの場所認識などについての比較検討をつうじて一般化する作業が今後の課題となる。

【Keyword】 山本泰順、『洛陽名所集』、場所認識、視覚資料、嵯峨野

#### 【 附記 】

本稿は、平成 25 年（1013）3 月に、神戸大学人文学研究科に提出した博士論文『近世・近代の京都および周辺都市における名所観の成立と変容』の第 3 章後半部分を大幅に加筆修正したものである。なお、本稿は、平成 31 年度文部科学省科学研究費基盤研究 C（課題番号：19K01193）「視覚資料の空間表現に関わる歴史地理学と東洋美術史の学際研究」（研究代表：長谷川奨悟）の成果の一部である。

#### 【参考文献】

- 青柳周一（2002）『富嶽旅百景—観光地域史の試み—』角川書店。
- 市古夏生（1975）「『理屈物語』作者考—山本泰順と苗村丈伯—」国文白百合 6、10-20。
- 市古夏生（1993）「山本泰順と中川喜雲」国語と国文学 70、80-90。
- 市古夏生（1998）『近世初期文学と出版文化』若草書房。
- 市古夏生（2010）「江戸から明治に至る版權と報酬の問題」江戸文学 42、4-19。
- 上杉和央（2004）「一七世紀の名所案内記に見える大坂の名所観」地理学評論 77- 9、589-609。
- NPO 法人さらんネットガイドブック委員会（2018）『京都 嵯峨野誕生物語』、NPO 法人さらんネット。
- 鎌田道隆（2000）『近世京都の都市と民衆』思文閣出版。
- 鎌田道隆（2005）「近世的都市観の生成—京都・大坂—」大阪照合大学商業史博物館紀要 6、23-35。
- 川嶋将生（1999）『「洛中洛外」の社会史』思文閣出版。
- 神崎宣武（2004）『江戸の旅文化』岩波書店。
- 京都市（1972）『京都の歴史五 近世の展開』学芸書林。
- 京都市（1994）『史料 京都の歴史 第 14 卷 右京区』、平凡社。
- 熊倉功夫（1967）「寛永文化の後継者—『洛陽名所集』の著者とその父—」史潮 100、18-29。

- 米家泰作 (2005) 「歴史と場所—過去認識の歴史地理学—」 史林 88- 1、126-158。
- CDI (1973) 『京都庶民生活史』、京都信用金庫。
- 菅井聡子 (1999) 「江戸時代京都の名所案内記と遊歩空間—類型化と編纂史の分析を通じて—」 地域と環境 2、29-39。
- 下坂守 (2003) 『描かれた日本の中世』 法蔵館。
- 鈴木章生 (2001) 『江戸の名所と都市文化』 吉川弘文館。
- 谷崎友紀 (2017) 「旅人の属性にみる名所見物の特徴—武蔵国から京都への旅日記を事例に一」 人文地理 69-2、213-228。
- 鶴見誠 (1940) 「名所記概説一名所観に及んで—」 古典研究 5- 6、51-62。
- 中村利則 (2002) 「町人の文化—名所と町並み—」 (京都造形芸術大学編『京都学への招待』 角川書店) 135-146。
- 野間光辰 (1940) 「山本泰順父子の最期」 洛味 涼風号、67-69。
- 野間光辰 (1969) 「解題」 (野間光辰監修『新修 京都叢書 第十一巻』 臨川書店) 4- 8。
- 長谷川奨悟 (2009) 「『雍州府志』にみる黒川道祐の古跡観」 歴史地理学 51- 3、25-43。
- 長谷川奨悟 (2012) 「近世上方における名所と風景—明里籬島『都名所図会』『攝津名所図会』を中心に—」 人文地理 64- 1、19-40。
- 長谷川奨悟 (2018) 「都市伝説と『名所図会』」 (都市史学会編『日本都市史・建築史辞典』 丸善出版)
- 長谷川奨悟 (2019) 「名所図会資料に対する歴史 GIS 分析」 (平井松午編『近世城下絵図の景観分析・GIS 分析』 古今書院) 125-149。
- 長谷川奨悟・網島聖 (2019) 「視覚イメージからみた佛大本洛中洛外図屏風」 佛教大学宗教文化ミュージアム研究紀要 15、27-46。
- 長谷川奨悟 (2020) 「『京童』にみる中川喜雲の名所観」 佛教大学宗教文化ミュージアム研究紀要 16、19-43。
- 林家辰三郎 (1953) 『中世文化の基層』 東京大学出版会。
- 原淳一郎 (2013) 『江戸の旅と出版文化』 三弥井書店。
- 藤川玲満 (2010) 「名所図会をめぐる書肆の動向—小川多左右衛門と河内屋太助—」 江戸文学 42、38-49。
- 古田雅憲 (2000) 「『京童』挿絵小考 (1) 卷一「誓願寺」と「和泉式部」—」 文教国文学 43、1-14。
- 馬淵美帆 (2011) 『絵を用い、絵を創る』 ブリュッケ。
- 村井康彦 (2002) 『日本の文化』 岩波ジュニア新書。
- 森潤三郎 (1979) 「洛陽名所集とその著者に就きて」 (『日本書誌学大系 9 考証学論考』 青裳堂書店) 252-259。
- 安田富貴子 (1974) 「『洛陽名所集』 解題」 (横田重監修『近世文学資料類従 古版地誌編 3 洛陽名所集』 勉誠社) 645-655。
- 安田富貴子 (1976) 「山本泰順考—或る名所記作家としての生涯—」 橘女子大学研究紀要 4、28-40。
- 山近博義 (1999) 「近世名所案内記の特性に関わる覚書—「京都もの」を中心に—」 地理学報 34、95-106。
- 山口敬太・出村嘉史・川崎雅史・樋口忠彦 (2010) 「近世の紀行文にみる嵯峨野における風景の重層性に関する研究」 土木学会論文集 D66- 1、14-26。
- 冷泉為人 (1998) 『寛永文化のネットワーク『隔冥記』の世界』 思文閣出版社。

〈注〉

- (1) 『江戸文学』 42 は、「近世の書籍をめぐる版權と報酬—近世から近代へ—」という特集が組まれ 11 本の論考が掲載された。ここでは、近世における書籍出版とその版權問題に関する検討の中で、書肆が新たに名所地誌本を刊行する際には、同類と見なされる既存の版木を求版し、その書籍に関する権利の取得を行っていることが詳らかにされている。



- (2) 熊倉（1967）は、寛永文化の展開は、公家僧侶層に豊かに蓄えられてきた中世以来の交互名教養が、新たに自己主張を始めた上層武士によって触発され、啓蒙と想像を繰り返しながら伝統文化として継承される遺産を遺すと同時に、偉大な啓蒙家を多数生み出したと指摘している。
- (3) 森の調査は、大正天皇の即位大典を記念して編纂された『京都叢書』の増補本とされる『増補 京都叢書』に『洛陽名所集』を収録するに当たって、大正期に行われた資料調査で、その成果は昭和 54（1979）年に青裳堂書店より刊行された『日本書誌学大系 9 考証学論考』に収録されている。
- (4) 平成 26 年度京都府立大学地域貢献型特別研究（ACTR）「名所案内記の誕生—京都府立総合資料館所蔵古典籍の活用と—『国際京都学』へのアプローチ」（研究代表：藤原英樹）、[https://www2.kpu.ac.jp/letters/hist\\_studies/meisyoki/index.html](https://www2.kpu.ac.jp/letters/hist_studies/meisyoki/index.html)（最終閲覧日：2021 年 1 月 20 日）
- (5) 『新修 京都叢書 十一巻』には、③村上次郎右衛門版—寛文 4（1664）開版—を基本資料として収録している。
- (6) 前掲 4
- (7) 前掲 4 では、版について年季によって整理しており、①板司仁兵衛版、②吉田庄左衛門版、③村上次郎右衛門版、④中野小左衛門版、⑤無刊記版、⑥永楽屋七良兵衛版と整理し、『洛陽名所集』の調査にあたり、③村上次郎右衛門開板に相当する京都総合府立資料館所蔵のものを使用したという。
- (8) 国立国会図書館デジタルコレクション「洛陽名所集」（最終閲覧：2021 年 1 月 27 日）
- (9) ③村上次郎右衛門版には泰順の序がみられないため、野間には本書を『新修 京都叢書』に収録するにあたり、別途掲載したものと考えられる。
- (10) これは、再版時に改編が行われた可能性も考えられる。しかし、たとえ初版であっても、『都名所図会』などといった名所案内記においてもみられるものであり、このずれに関しては、既存の名所研究でも取りあげられてこなかった事象の一つであったといえよう。
- (11) 本節において、以下に示す項目の後の（ ）は、表 1 に示した番号に対応している。
- (12) 『洛陽名所集』の挿絵の作者をめぐることは、安田（1974）は、絵師である父友我筆の可能性を示唆したが、後に別稿（1976）において泰順が自ら描いたものと結論づけている。
- (13) この点について市古（1993）は、漢学者として身を立てる泰順と町医者となりわいとする喜雲は、ともに親の世代から仕える主家をもたない身であり、彼が名所地誌本を編纂できる高い教養と文芸力を著書を通じて提示することで名声を獲得し、士官につなげようとする意思表示であったとみられている。
- (14) 当該地域にみられる歴史性や信仰といった地域文化の特徴を啓蒙し、現在における地域遺産の積極的な活用を念頭に活動されている NPO 法人さらんネットのガイドブック委員会（2018）（以下、さらんネット（2018）と記す）は、当該地域の範囲について、旧葛野郡のうち、四囲を小倉山あたりを西限とし、御室川・天神川の少し東を東限、西原山のあたりを北限とし、梅津や松尾あたりを南限とした範囲と想定していることから、京都市（1994）でいうところの「嵯峨野」と「宇多野」を合わせた地域を嵯峨野ととらえている。
- (15) さらにさらんネット（2018）によれば、嵐山城の遺構は、現在でも南曲輪の北側には土塁や堀切、その一部に石垣が設けられた階段状の曲輪跡が確認できるといふ。
- (16) 巻之十のうち、水尾（198）と鹿背山（204）は、地域から外れた場所と思われるが、いずれも愛宕山に関連する場所として取りあげられているため、本稿ではこの 2 か所についても嵯峨野に含めて考察した。